金刀比羅宮神境案内記

特35
834

014027-000-0

特35-834

金刀比羅宮神境案内記

松岡　調（香木舎）／編

M28

ABB-0280

特35
834

正殿祭神
相殿祭神
正殿鎮座
相殿勸請
宮殿建築

金刀比羅宮神境案内記

玉藻吉讃岐國那珂郡琴平山に鎮座ひ、金刀比羅宮の御祭神、正殿は大物主大神に坐して、畏くも天祖天照皇大神の御弟素盞嗚尊の御子孫にあらせられて、國津神八百萬神を統率爲し、幽神事を治安爲し給ふ、嚴神にぞ坐々しける、相殿に座ひ、皇祖神日本磐余彦天皇（神武天皇）より七十五代にあたらせら、る崇德天皇（御名顯仁）の大御靈に座々しけり、偖も正殿大神の御鎮座は、神代のむかし彦火火出見尊の御代より、本宮緣起に當山ゝ垂跡已に三千年に垂んとゝと見えたり、相殿合祀の御神靈は、永萬元年七月の勸請に坐せり、宮殿の構造ゝ事、上古は詳らずと雖へども、中古に至り長保三年に藤原實秋勅を奉じて建築ありしが、其後度々興廢ありて、天正十

宮殿再營

一年九月に長曾我部元親本願主にて再建あり、又萬治三年八月二十八日に、當時の國守松平讃岐守頼重の再營に係れるが、金銀を鏤め丹青を施したりしも、二百三十餘年の星霜を經るがまゝに、裝飾も落剝したれば、明治十一年に至り、官許を得て清々しく再建せり、其結構は千木高く天そゝり立、

新營結構

宮殿は總て檜材の素潔無節にして、彩色及び彫刻の虚飾を用ゐずして、要所要所に鍍金の金具を打ち、壁板天井等には櫻樹の蒔繪を描き、金銀燦然櫻花の光艶、見る者其精巧に驚かざるは無し、年中の祭典て、祈年新嘗の官祭を除く外に、大祭は十月九日十日十一日の三日間に亘りて、石淵の行宮へ神輿渡御ありて、嚴肅なる祭典數度の内、大和舞御巫舞東遊獻馬式等あり、此祭典には上の齋場次に齋場など云ふ二つ

年中祭典

十月大祭

の齋場を設くるを始め、古雅なる式典頗る多し、此大祭に先立て、九月八日に潮川神事といふあり、其は當年の大祭に奉仕する者上下の別無く身禊を行ふ式を云なり、又一月十日三月十日に中祭、六月十日八月廿六日九月十日には小祭等に執行ありて、此兩祭のをりは何時も大和舞八少女舞等の奉奏あり、又月次祭は毎月一日十日廿六日乃三度なり、又殊に春秋に櫻花祭紅葉祭と云臨時祭ありて、櫻花祭には櫻花、紅葉祭には紅葉及、社殿神饌其外調度に至るまでに裝飾せる優美なる神事あり、次に境内なる末社乃祭神に事代主さんに先三穂津姫社は御別宮とも稱し、即ち正殿御祭神に后神、三穂津姫命にして、高皇産靈尊の御娘なり、かくて社殿は所謂皇子造にして、其結構本宮に亞て壯觀なり、眞須賀

潮川神事

中祭小祀

櫻楓兩祭

境内末社

三穂姫社

旭社構造

社は素盞嗚尊と、奇稲田姫命とを坐さして、正殿御祭神は御祖神なり、睦魂社は、大國魂神大國主神と、少彦名神乃三座をして、正殿御祭神は御別名と、御義兄弟乃神とを坐す、事知社は、事代主神、味鉏高彦根神、加夜鳴海神は三座をして、正殿御祭神乃御子神なり、御年社は、大年神、御年神、若年神は三座にして、是も正殿御祭神は御親族は神なり、外に旭社常磐社菅原社嚴魂社大山祇社祓戸社火雷社等ある内、旭社は、造化三神と、天神地祇八百萬神とを齋祀し奉る、社殿構造まづ二層は入母屋造にして廣大なり、其高さ六丈壹尺餘、桁行六丈梁間も亦六丈なり、甍瓦は銅板、木材は總て槻樹ならざるは無く、四面は拱料戸扉等に至るまでに、花卉禽獸人物など彫刻す、皆當時良工の手に成れる物にして、實に美術の神髓を抽くるは

菅社肇祖

金剛坊鑒

二季大祓

域内雜舍

を云ふべし、上層は正面に扁額を掲げて、降神觀と書けるは、劉雲臺が筆蹟なり、菅原社は、菅原道眞の靈を祀る、此靈を祀れる故は、仁和年間道眞當國守たりし時、本宮を信仰ありし縁故によりて、薨去の後祀れる所なりとぞ、嚴魂社は、舊別當金光院中興の祖と仰ぎし大僧正金剛坊宥盛にして、本宮に於て夥多の功績ありしに依て、僧侶と雖も維新の際、神式を以て其靈を祀れるなり、祓戸社は祓戸四柱の神を祀る、二季の大祓又大小祭及び臨時祭典等のみ必ず此社前にて身禊を行ふ、火雷社は、火產靈神にして、塞神三座と合祀する所にて社殿は相殿造なり、二季の大祓後、道饗鎭火乃兩祭を此社前にて行ふを例とせり、再び上りて附屬雜舍の事なども聊か述んに、御饌殿は、官祭大中小の祭典及び月次祭朝夕の御

樂殿巫女

神輿玲瓏

齋場鑽火

一月忌籠

饌とも料理とゝ、又祭具を調整する所なり、樂殿は、神樂殿をも兼て、祭典毎に伶人奏樂とゝ、又巫女兩三名づゝ日々出勤して、參拜人に請願ゐ應じて、神樂を奏舞する所なり、神庫ゐは、神寶神具等を藏め、神輿庫は、神輿及納めたり、神輿に金具は總て銷金ゐして、櫻花を描き日蔭蔓及刻み、其外金銀珠玉を以て裝飾せしもゐゐて、實に玲瓏燦爛たり、十月に大祭ゐは、此神輿ゐて石淵の行宮へ渡御あるなり、御炊屋は、大中小に祭典は、元より朝夕ゐ獻備する御饌をも炊く處、又祓舍は、特別參拜の者、或は講社加入に者等乃昇殿をる折祓除及行ふ所、又齋場所は、平日神職に齋戒する處ゐして、鑽火をかして他火及交へに、殊ゐ一月に忌籠、或は臨時祭等の時ゐは、宮司始此齋場ゐ止宿して、嚴重に執行する事なり、繪馬舍は、全國乃

額舍名蹟

柳門起元

神廐生馬

人民上下に差別無く、祈願報賽乃爲め、奉納する扁額及掲ぐる所ゐゐて、古來有名なる物數多ありしかど、山賀に爲追々落剝して、今日ゐ鮮明なるは、森狙仙の猿、圓山應瑞に童舞陵王、谷文晁の羅陵王、菊池容齋乃爲朝等なり、賢木門、元は逆木門と云ひしなり、其は天正十二年十月ゐ長曾我部元親が神威及恐るゝ事ありて一夜の内ゐ建立せしゐ依て誤て柱を逆木ゐ建しより、世間ゐ逆木門と云來れるを維新に際再營して、逆木乃二字及賢木と改めさるあり、如斯て掲げたる額は、有栖川二品熾仁親王乃眞蹟なり、木馬舍は、木馬を安置せり、是は松平讃岐守頼重乃寄附ゐかゝれり、神廐ゐは、生馬二三頭及飼置けり、十月大祭に をりゐえこれゐ唐鞍移鞍を置きて、行幸乃御先ゐ供奉させて、翌日に獻馬式をも奉仕さに

神域大門
講社本部
皷樓清塚
守拜受所
社務本廳
床障紙畫

るなり、大門は、樓門造なり、神域は東端に在て、慶安二年乃再營み係る、上層乃額は琴平山乃三字は、有栖川二品熾仁親王乃眞蹟なり、此大門外は左み講社本部あり、本宮崇敬講社に加入せんと欲る者は、必ず此所にて請願ひべし、又右傍に皷樓ありて、鶏人晝夜時を報ずるなり、此地に清塚とて清少納言の墓と云傳へて、友安三冬乃和文は碑石あり、安み社務所は、大門内に在て、稱別當金光院住職復飾の後、其儘社務所とはなせるなり、社務所門に入り、右傍に御守處あり、參拜人乃御守札を拜受ひる所なり、正面乃玄關ありて、社務所本廳とす、是を構造壯大乃して、木階を上れば、床の張附を、金地にて墨畫の檜み鷲の圖は、森寛齋の揮毫なり、此處より左階を上り、表書院に至れば、先鶴の間とて、床の張附及び障子等、皆圓

山應舉の筆みて、蘆或は若松に鶴の圖なり、又一室あり一濶場なり、虎の間と云、障子十六枚畫く遊虎の圖なり、中にも二頭の猛虎溪水を呑み居る所、水飲の虎とて誰も稱賛せり、款に天明七丁未夏月寫平安源應舉とあり、又一室あり七賢の間と云、八枚の障子に竹林の七賢人の圖、下段の障壁皆山水、共に應舉の筆にして、款み寛政甲寅初冬寫平安源應舉とあり、されば再度參拜せしをり畫く所のものと見えさり、殊に上段の床の張附瀑布の圖は、夏日にして見る者凉風を感ひ、いづれも墨畫乃て一面に金は砂子を蒔さるを、山質の憂ひを防ぎんが爲なるべし、立返り總て畫樣乃精妙、實に海内比ひ無しといふとも誇稱にもあらざるべし、巨擘の應舉に於ても畢生の絶筆とす、或人評賛して云、鶴乃雲霄に翺翔し苔

岸岱丹青

若冲花卉

を水澤に啄む、生氣活動するが如し、群虎の猙獰牙を現ぜ眼を瞋す、獨り百獸のみならず、人をして震慄ならしむ、竹林は瀟洒なる七賢の嗜好に隨ひ、晉時の世を弄ぶの情況寫して歴々たり、下段障壁乃山水風致を殊にす、上段正面は大瀑布は、潰沫座間に迸るかと訝り、亦銀河の九天より落つるかと疑へしむ、畠伯の能事も此に至りて畢ると云べし云々と、此觀を終へて廊を廻りて、奥書院に至れば三室あり、入れを柳の間と云、障壁は、岸岱が金地に綠柳白鷺を畫けり、以て名とし、上室二あり、一は障子は菖蒲に鴛鴦長押に百蝶は圖、一は春野若松長押に、遠山は圖、皆着色にて四時陽春乃想あらしむ、上段あり壁皆伊藤若冲の花卉、絹爛人乃心目を奪ふ、いづれも幽雅清楚愛す可く、觀るべきものなり、爰に東軒に出れ

ば、一望豁然、近くは那珂鵜足乃田地飯山は麓に廣漠たり、遠くは城山松山を隔て、遥に小豆嶋屋嶋等乃起伏蜒蜿として一目に中にありていづれも手を打ざるはなし、又古く當山十二景と云ありて、故人乃詩歌もあれど、世移り境變り事實に合ざれば、近頃新に撰定して、諸名家の詩歌を蒐集せしが有を聊か抄出し、又其十二景の説明をも加へんとす、

其一　櫻節春祠（こは大門より本宮までの所々にて、櫻樹數百株を列植し、春風温和の時は、花光爛漫一見心醉せば、遠路の參拜人も、歸路を忘るるに至らしむ、）

谷口春酣紅映霞、祠前祠後匝櫻花、香風拂地人如玉、一隊女兒停寶車、

錦山

其二　皷樓松翠（大門外に皷樓ありて、四季晝夜のわかち無く、時を報する水は、松翠のかはらざるが如し、）

まつかぜにおとうちそへて、かゝやゆ乃、さかきつゝ美

れ、おとぞきあゆる、

其三　前市納涼　清矩

平町は、參拜の男女、嚴寒酷暑の別無く、日々數千の多きに至れは、隨て旅人宿屯軒を並べて繁榮の市街なり、止宿の諸客、盡の極熱も夜に入りては、月光のはゐて、涼風身にしみ、はと〳〵秋かの思ひをなさしむるなり、

前市の、よるれにゞみれ、とこしめて、夏をも秋に、かへて

ゐるかな、

其四　複道彩虹　眞賴

世間に云、鞘橋の事にて、是は平町の中央を流る、石淵川に架せる橋にして、其歴久し、本宮社藏なる元祿年間の日本繪師清信の筆にかゝる、當山の圖の屏風にも見ゆたり、屋根は銅瓦にて葺きたるが、度々の激流を恐れて、橋柱を用ゐざる構造なれば、畏なとに、天の浮橋と詠めるもさる事なり、又雨後にをり〳〵彩虹のわらはれて、青緑のさまいとうるはし、文政九年の再建なり、

あをやこれ、ゐめ乃うきはし、うべしこそ、わゞ大神のと

ゐりまちぬれ、　幹文

其五　宕峰夕陽

宕峰とは、豐宕社の一峯を云ひて、老松枝を垂る、夕ばゐのさま、殊にめでたければ、一勝に數へたるなり、

樹陰石壇雲遶廊、一溪暝色欲昏黃、賽祠人去歸鴉亂、嶺上老松空夕陽、　鳴鶴

其六　後林探蕈

後林とは、金刀比羅宮境内の南北の叢林を云、秋氣に至れは、松蕈數多を生ず、其芳香美味他に殊なれば、近頃之を鑵詰にして、名産とせば、旅人の求るもの甚た多し、

小林ゐ、生たつ笠は、あきのあめれ、てれて後ゐそ、とるべ

かりけれ、　豐穎

其七　楓時秋禊

九月八日、十月十日の大祭にわづかる者、いつも此石淵く、立田姫のぬさと奉る錦に似たり、此神事は、後嵯峨天皇の御代寛元元年より行ひ來れるよし、牧野古墨の漢文の碑石あり、

琴祠秋靄翠微中、下有清流上有楓、靈鼓坎々醉人散、神鴉啼送夕陽紅、　槐南

其八　象山新月

象山とは、孚平山の山形により象頭山といへば、又象山とも云るなり、三日月の山の南端にかゝれるは絶景と云へし、與謝蕪村の、三日月の牙とぎいだす象頭山、と云句あり、

しらべにむ、琴ひらやまの、山松ゐ、かゝるゐ高し、夕月れ

かげ、

其九　燈閣鵠聲、美靜

燈閣は、高さ十三間半あり、故に俗に高燈籠と云、安政年間の造營にかゝる、この燈火を有明の月かと、杜鵑をうく鳴き過ぐるかあうと聞けり、

森々老樹白雲齊、夜閣高懸新月低、裂帛有聲人矯首、燈光一六

其十　狹川白雨、

狹川は狹間川の邪にて、又祓川ともいふ、本國第一の巨川たり、夕立のをりは殊に激白く流れて最も清し、

荷葉蓋頭兒可憐、隨機有個碧田々、雨何避日日何雨、一任三

白撞過峽川、

其十一　飯峯初雪、聽秋

飯峯は飯山なり、孤山にして山脈を四方へ長く曳けり、

と稱ふ、西行法師も、さぬきには是をや富士といひの山云々と詠れ初雪の時は、恰も畫ける富士の如し、故に土人曰岐富士たりとろ、之によりて詩人は小芙蓉ともいへり、

落木江天雁影橫、荒涼無復野虫鳴、曉來忽覺新寒峭、小富山頭薄雪明、

其十二　龜嶽遠霞、黃石

龜嶽は丸龜の城山の事にて、今は陸軍の衛戍となれり、

眉の如く見ゐて　雲平山より眺望すれば、遠く霞わたりて、吉備つ兒嶋のいはんかたなし、

賽神人泊短篷中、檣影森々滿港風、落後一船來遠浦、殘霞竹秋

燒海暮帆紅、

あれこの外にも勝地て數多あれとも、先此十二景撰びさるものなり、

明治二十八年三月

金刀比羅宮社務所

明治廿八年五月十七日印刷
仝　年仝月三十日發行

〔定價金五錢〕

香川縣那珂郡琴平町
發行者　金刀比羅宮社務所

仝縣仝郡仝町十五番戸
編纂者　松岡調

仝縣高松市濱町百貳番戸
印刷者　新居政七

仝縣仝市仝町仝
印刷所　新居活版所

版權所有